



授業実践 Part 1

会計分野における探究的なアプローチと 会計人材の育成

—『任天堂』の財務諸表から企業のドラマを読み解く—

下関商業高等学校 井上 幸助

1. はじめに

本校では2年生から学科・コースを選択し、各コースに応じた商業の専門性を身に付ける授業を実施している。本授業実践は、会計分野に関する高い専門性を身に付ける「会計コース」の生徒を対象に実施した、財務会計Ⅰの授業である。

2. 学習指導要領と現状に対する課題意識

学習指導要領では財務会計Ⅰの目標に『商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、会計情報の提供と活用に必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。』と明記されており、会計情報をビジネスに役立てることの必要性が示されている。

しかし、現状では会計処理の学習や財務諸表分析指標の暗記に終始していることが多く、会計情報を活用して経営やビジネスの在り方を考える機会が少ないと感じる。会計の魅力は財務諸表に表れる数値を多面的に解釈し、その分析結果をビジネスの意思決定に生かしていく点にあると考えるが、その段階を生徒が体験しないのは商業教育において大きな損失であると感じる。そこで、今回は財務諸表分析の単元において、実在する企業の財務諸表を用いた分析を通して、数値の背景や企業の経営状況を読み取り、それらが経営判断や企業活動と結び付いていることを実感させたいと考え、授業を立案した。

3. 分析企業の選定

財務諸表分析の対象とする企業は①生徒にとって身近な企業であること、②特徴的な財務諸表で

あることを条件に選定した。今回の授業では時系列分析をテーマにするため、会計年度ごとに財務諸表の数値が大きく変動するものが良いと考え、ヒット商品の有無や社会情勢、技術の進展などに大きく影響を受ける「任天堂株式会社」を取り上げることにした。後述するが、任天堂は今でこそ高い営業利益率を誇っているが、十数年前まで遡ると営業利益率がマイナスだった会計年度もある。なぜマイナスになってしまったのか、それをどのように乗り越えて今の業績にたどり着いたのか、時系列分析の教材に適した企業である。また、近年発売された任天堂のハード機器は社会現象になるほどで、多くの生徒たちが実際に手に触れて体験している。生徒の興味・関心を引き付けるという意味でも教材として適切である。

4. 疑問から始める

授業ではまず任天堂に対するイメージを引き出すところから始める。任天堂を知らない生徒はごく少数で、何かしらのイメージは出てくる。「マリオが有名」といった商品に関するものや「儲かっている」といった財務諸表に関するものなど様々だが、そのどれもが基本的にはポジティブなイメージである。生徒たちの中には、漠然と「大きくて安定した会社」というイメージが存在する。

そこで、まずはそのイメージを揺さぶるために図1のような資料を与える。これは損益計算書を図式化したもので、片方は昨今の好調時のもの、もう一方は営業利益率がマイナスとなった不調時のものである。この資料に触れることを通して、任天堂は常に安定した利益を計上しているわけで

はなく、多様なリスクを抱えるゲーム業界の中で、逆境にも耐えうる財務体質を構築しながら現在の地位を得たというドラマにつなげることを狙いとしている。ここでは、生徒のイメージを揺さぶり、「任天堂ほどの会社が不調になるのはなぜだろう？」という疑問が、生徒の中から生まれるように導くことが重要であると考え。既有的イメージとのギャップから課題意識を喚起するのである。

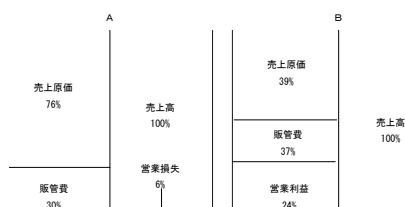


図1 損益計算書の比較 (ワークシート) 不調時 (A) 好調時 (B)

5. 分析内容

実際に分析する段階では、業績の変動が激しい理由を損益計算書や決算説明会資料から読み解くパートと、そのような状況においても堅実に成長し、高い営業利益率を誇るようになった原動力である財務体質を貸借対照表から読み解くパートに分けて学習を進める。

まず、業績の変動が激しい理由は大きく①ヒット商品の有無に左右されること、②季節に売上が左右されやすいこと、③ハード機器が普及していることが利益を上げる前提条件であることが挙げられるが、これらについて学習する際は特に具体的な数値に着目する点に注意して指導する。

例えば、③については決算説明会資料で「売上対ハード比率」という指標が示されており、それが売上総利益率と反比例していることを実際に計算して確認する。これにより、任天堂はハード機器をできるだけ低価格で販売し、普及させることで利益率の高いゲームソフトの売上を支えるという利益構造が見えてくる。さらにそこから、ハード商品が不調に終わった時期は営業利益率もマイナスの値を計上していることにもつながり、最初の疑問の「任天堂ほどの会社が不調になるのはなぜだろう？」という問いへの答えが明確になる。

次にこのようなリスクの高い業界にありながら

堅実に成長し、高い営業利益率を誇るようになった原動力を明確にしていく。貸借対照表を見れば明らかであるが、①多額の現金を保有し、②借入金がほぼ存在せず、③有形固定資産の所有が少なく固定費が削減されている点が分かる。ここで注意することは財務諸表分析指標を用いて説明することである。生徒の中で「暗記するもの」になってしまいがちな分析指標を「有用なもの」とするために、説明の根拠として用いる。漠然とした数値の羅列が指標に置き換わることで比較も容易になり、指標の重要性を感じることができる。

このように生徒の中に生まれた疑問を解決していくような授業を進めることで、財務諸表を解釈する楽しさを感じることができる。財務諸表の数字を単独で読むのではなく、指標や決算説明会資料などと組み合わせながら読み解くことで、企業戦略が浮かび上がり、そこには時代や社会の変化に即したドラマがあることが分かる。

6. 課題と展望

本授業実践を通して、生徒からは「会計が楽しくなった」「財務諸表にこんなに情報が詰まっていると思わなかった」という振り返りがあった。財務諸表分析を単純な計算ではなく、数字を解釈し、そこにビジネスのあるべき姿や経営戦略を見出すことはまさに学習指導要領に掲げられている「商業の見方・考え方を働かせる」ことになるのではないだろうか。

一方で課題として、生徒自身が財務諸表を選定し、企業を分析していく段階にあまり繋がっていない点が挙げられる。本授業実践では、学習成果を活用する場として、生徒が主体的に企業分析を行う活動を授業の終末に位置付けていた。しかし、そのレポート作成では生成 AI を用いたと思われる記述も見られ、中には分析結果の要約に留まり、生徒自身による「解釈」が十分に行われていないものもあった。今後は分析のプロセスや着眼点を伝えていくなどの工夫をすることで、主体的に財務諸表を読み解き、企業の実態を考察できる力を育成していきたいと考えている。